



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	第14回北海道大学埋蔵文化財調査センター調査成果報告会要旨集
Issue Date	2025-02-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94155
Type	report
File Information	chosa_seika_hokokukai_youshishu_14.pdf



第 14 回

北海道大学埋蔵文化財調査センター調査成果報告会

要 旨 集



K39遺跡こども本の森地点 2b層で発見された深鉢形土器（続縄文文化後半：約3世紀から約5世紀）

令和 7 年 2 月 24 日

北海道大学埋蔵文化財調査センター

第 14 回北海道大学埋蔵文化財調査センター調査成果報告会

開 催 日：令和 7 年 2 月 24 日(月・祝)

開催場所：北海道大学学術交流会館第一会議室

主 催：北海道大学埋蔵文化財調査センター

プログラム

13:00 開場

13:30 開会

〈第Ⅰ部〉調査成果報告

13:35 高倉 純（北海道大学埋蔵文化財調査センター）

「2024年度における調査研究の成果」

13:50 守屋 豊人（北海道大学埋蔵文化財調査センター）

「K39遺跡こども本の森地点の調査」

14:30 休憩

〈第Ⅱ部〉特別講演

14:40 鈴木 信（公益財団法人北海道埋蔵文化財センター）

「続縄文文化についての見解」

15:30 質疑応答・討論

16:00 閉会

目次

2024 年度における調査研究の成果・・・・・・・・・・・・・・・・	1～ 5
K 39 遺跡こども本の森地点の調査・・・・・・・・・・・・・・・・	7～12
続縄文文化についての見解・・・・・・・・・・・・・・・・	13～14

2024 年度における調査研究の成果

高倉 純／北海道大学埋蔵文化財調査センター

1. 調査活動の概要

北海道大学埋蔵文化財調査センターは、埋蔵文化財の包蔵地に登録されている北海道大学札幌キャンパス内での埋蔵文化財の保護・調査研究活動に従事している。北海道大学の札幌キャンパス内には、サクシュコトニ川やセロンベツ川の流域沿いを中心として、縄文から擦文文化にかけての遺跡が密に分布することが知られている（図 1）。

2024（令和 6）年度は、学内で本発掘調査が 1 件、確認調査 4 件、計画調査 1 件の調査活動を実施した。

本発掘調査はこども本の森地点で実施している。

確認調査は、新規の工事計画にもとづき、その対象区域内の一部を調査対象とし、遺構・遺物の有無やその包含層のひろがり把握することを目的として実施する。今年度は、こども本の森新営工事予定地のほかに、野球場 A バックネット改修整備工事予定地、歯学部石碑移設他掘削工事予定地、未来創造棟新営工事予定地で実施されている。

キャンパス内における埋蔵文化財の遺存状況を、地形や堆積環境の復元も含め体系的に把握するために取り組んでいる学術調査としての計画調査を、今年度は中央キャンパス大学病院地区（北西側）で実施した。

2. 確認調査の成果

野球場 A バックネット改修整備工事予定地での確認調査は、令和 6 年 7 月 26 日～7 月 29 日に実施した。本予定地は、キャンパスの北西部に位置する。擦文文化の遺構・遺物のひろがり及んでいることが予測されたため、地表下約 1.0m の深さまで掘り下げる調査坑を 7 箇所設置し、調査を実施した。北側では埋没河道の存在を確認することができた。結果的にいずれの調査坑でも遺物・遺構は確認されなかった。

歯学部石碑移設他掘削工事予定地での確認調査は、令和 6 年 8 月 1 日～8 月 2 日に実施した。本予定地は、キャンパスの中央部分に位置する。擦文文化の遺構・遺物のひろがり及んでいることが予測されたため、地表下約 0.8m の深さまで掘り下げる調査坑を 2 箇所設置し、調査を実施した。結果的にどちらにおいても遺物・遺構は確認されなかった。

未来創造棟新営工事予定地での確認調査は、令和 6 年 9 月 4 日～10 月 17 日に実施した。本予定地は、札幌市域北部に分布していた沖積低地に立地している。本予定地は、現地地形をみると、北西方向へ流れていたサクシュコトニ川の右岸にひろがっていた平坦面に立地している。周辺では擦文文化に帰属する地点がこれまで調査されている。本調査では、18

表1 北大構内で発掘された主要地点

No.	地点名	文化	遺物	遺構	調査年次	報告書
1	サウクル倉庫	縄文	土器・石器・漆計800点	竪穴住居址3基、灰土8箇所	1990	I
2	応用電気研究所	縄文	土器・漆計30点	竪穴住居址1基(2面)	1990	I
3	共同演習室南	縄文	土器・石器・漆計104点	竪穴住居址4基	1991	2
4	サグシエコトニ川遺跡(栗田寮)	縄文	土器・土製品・石器・漆・動植物遺体等計58,673点	竪穴住居址1基、土坑6基、灰土7箇所、灰土段・炭化物集中13箇所、灰層遺体	1991 1992	2 サグシエコトニ川遺跡
5	農学部附属植物園	縄文	土器・石器・漆計30点	竪穴住居址1基	1992	3
6	申請室	縄文	土器・石器計574点	小竪穴2基	1994	5
7	ボゾラ山本東地区	縄縄文	土器・石器・漆・カラゴ玉計7,143点	土坑7基、灰土2箇所、小ビット12基	1994	5
8	工学部基礎力学研究棟	縄文	土器・石器計201点	竪穴3箇所	1998	8
9	学生部体育館	縄縄文	土器・石器・漆・動植物遺体等計1,061点	竪穴4箇所	1998	8
10	職員厚生施設	縄文	土器・石器・漆計75点	竪穴住居址1基	1997	7
11	共同演習室道路	縄文～縄縄文	土器・石器・漆・動植物遺体等計1,746点	灰土1箇所	1993	10
12	グストハウス	縄縄文	土器・石器・漆・動植物遺体等計335点	竪穴3箇所	1994	10
13	地球環境科学研究科研究棟第1	縄文	土器・土製品・漆計110点	竪穴1箇所、小ビット11基	1995	11
14	地球環境科学研究科研究棟第2	縄文	土器計27点	竪穴住居址1基	1999	XI
15	西門	縄文	土器・石器・漆計300点	竪穴住居址2基、屋外伊達2基、炭化物集中2箇所、土坑12基、漆計1箇所	1999 2000	XI XII
16	本部裏	縄文	土器・石器・漆計303点	竪穴住居址1基	2000	XII
17	工学部1・1棟間	縄文	土器・漆計481点	竪穴住居址1基	2000	XII
18	人文・社会科学総合教育研究棟	縄文～縄縄文	土器・石器・漆計83,588点、動植物遺体	竪穴住居址1基、屋外伊達・灰土段・炭化物集中2箇所、土坑8基	2001 2002	人文・社会科学総合教育研究棟 点I、II
19	馬術部馬場	縄文	土器・漆計81点	竪穴住居址2基	2001	XIII
20	パンダグラブ加速器室南	縄文	土器・石器・漆計25点	竪穴住居址1基	2002	XIII
21	創成科学研究棟南	縄縄文	土器・石器・漆計227点、動植物遺体	灰土段・炭化物集中2箇所	2003	XIV
22	サッカー・ラグビー場	縄文	土器・石器・漆計281点	屋外伊達2箇所	2004	XIV
23	弓道場	縄文	土器・石器・漆計332点	竪穴住居址1基、炭化物集中2箇所	2006	XV
24	農学部研究棟	縄文	土器・石器・漆計320点	竪穴住居址3基、炭化物集中2箇所	2007	XVI
25	南新川地区	縄文	土器・石器・漆計92点	竪穴住居址1基	2007	XVI
26	工学部共用実験研究棟	縄縄文～縄文	土器・石器・漆・木製品計13,917点、動植物遺体	竪穴住居址3基、伊達12基、灰土段・炭化物集中17箇所、土坑48基、小ビット3基	2008	工学部共用実験研究棟地点
27	市民会	縄文	土器・石器・漆計87点	竪穴住居址1基、炭化物集中3箇所、住居址1基	2008	XVII
28	南新川国際交流会館	縄文	土器・石器・漆計220点	屋外伊達7基、土坑・小ビット107基、炭化物・灰土段集中3箇所、漆計3箇所	2009	XVIII
29	北キャンパス道路地点北地区	縄縄文	土器・石器・漆計865点	屋外伊達3基、灰土段集中4箇所、小ビット17基	2009	XVIII
30	北キャンパス道路地点南地区	縄縄文	土器・石器・漆計837点		2009	XVIII
31	南キャンパス研究棟南棟北	縄文	土器・漆・土製品計22点	竪穴住居址1基	2009	XVIII
32	植物園改修棟	縄縄文～縄文	土器・石器・漆計274点	竪穴住居址1基、屋外伊達2基、土坑14基、小ビット10基	2009	XVIII
33	附属図書館本館南半壁	縄文～縄文	土器・石器・漆計10,608点	竪穴住居址1基	2009・2010	XIX
34	附属図書館本館東防火水槽	縄縄文～縄文	土器・石器・漆計19点		2010	XIX
35	附属図書館本館東周辺道路	縄縄文～縄文	土器・石器・漆・土製品計111点		2010	XIX
36	北キャンパス総合研究棟6号館	縄文	土器・石器・漆計127点	竪穴住居址1基、土坑2基、小ビット2基	2010	XIX
37	南新川国際交流会館外溝	縄文	土器・石器・木製品・漆計702点	竪穴住居址1基、伊達2基、炭化物集中2箇所、土坑18基、小ビット153基	2010	XIX
38	医学部陽子線研究施設	縄文	土器・漆・土製品計196点	溝2基、土坑1基	2011	XX
39	農学部バイオサイエンス研究棟	縄文～縄文	土器・石器・漆計574点	竪穴住居址4基、小ビット3基	2012	XXI
40	薬用植物園西	縄文	土器・石器・漆計142点		2012	XXI
41	大学病院セミナー棟	縄縄文	土器・石器・漆計788点	伊達7基、炭化物集中5箇所、灰土段集中2箇所、土坑7基、小ビット51基	2013	XXII
42	大学病院附水泳水泳施設整備	縄縄文	土器・漆計35点	土坑8基	2013	XXII
43	人獣共通感染症研究施設施設	縄文～縄文	土器・石器・木製品計2,582点		2013・2014	XXIII
44	国際科学イノベーション拠点施設	縄文	土器・石器・木製品計427点	竪穴住居址2基、土坑3基、小ビット14基	2013・2014	XXIII
45	農学部実験室整備	縄縄文～縄文	土器・石器・漆計5,002点	竪穴住居址3基、土坑10基、伊達3基、住居址15基	2014	XXIV
46	医学部地区雨水排水施設整備	縄縄文	土器・漆計36点	伊達4基	2014	XXIV
47	事務局本館南外排水設備	縄文	土器・石器・漆	竪穴住居址1基、土坑1基	2015	XXV
48	事務局非常用災害発電設備	縄文	土器・石器・漆	竪穴住居址1基、土坑1基、小ビット1基	2015	XXVI
49	旧留学生センター改修	縄縄文	土器・漆	土坑1基	2015	XXVII
50	管理棟	縄縄文～縄文	土器・石器・漆・土製品・土器製品	竪穴住居址1基、土坑16基、小ビット32基	2018	XXVIII
51	獣医学研究科化学物質暴露・感染実験施設	縄文	土器・石器・漆	土坑3基、小ビット10基	2018	XXIX
52	獣医学研究科動物実験研究施設	縄文	土器・石器・漆	竪穴住居址1基、伊達2基、炭化物集中箇所1基、灰土段集中箇所2基、小ビット2基	2018	XXIX
53	南キャンパス理学部	縄縄文	土器・石器・漆	土坑1基、小ビット2基	2018	XXX
54	医学部百年記念館	縄文	土器・漆・木製品	竪穴1箇所、2箇所等	2017	XXXI
55	中央キャンパス教育学部北	縄文	なし	竪穴住居址1基	2017	XXXII
56	総合研究棟(機械工学系)	縄縄文～縄文	土器・石器・漆	竪穴住居址2基、灰土段集中1箇所、炭化物集中2箇所、土坑5基、小ビット3基	2018	XXXIII
57	北方生物圏ワールド科学センター実験室整備	縄縄文～縄文	土器・石器・漆・土製品	竪穴住居址1基、伊達5基、灰土段集中箇所19基、炭化物集中箇所2基、土器集中箇所2基、土坑8基、小ビット13基	2019・2021	XXXIV
58	R39第8次	縄文	土器・石器・漆	竪穴住居址1基、伊達2基、炭化物集中箇所1箇所、土坑1箇所、小ビット1箇所	1998 ～1999	札文報85 (札幌市教養委員会)
59	R39第9次	縄縄文～縄文	土器・石器・漆	竪穴住居址2基、灰土段集中2箇所、伊達1基、灰土段集中・炭化物集中2箇所	2000	札文報89 (札幌市教養委員会)
60	R436第2次	縄縄文～縄文	土器・石器・漆	竪穴住居址2基、灰土段集中2箇所、炭化物集中2箇所	1998	札文報83 (札幌市教養委員会)
61	遺跡保存館	縄文	土器・石器・漆	無掘：竪穴住居址7基、井布：凹3つち千明産10)	1992	北方文化研究報告 (北海道大学実施)

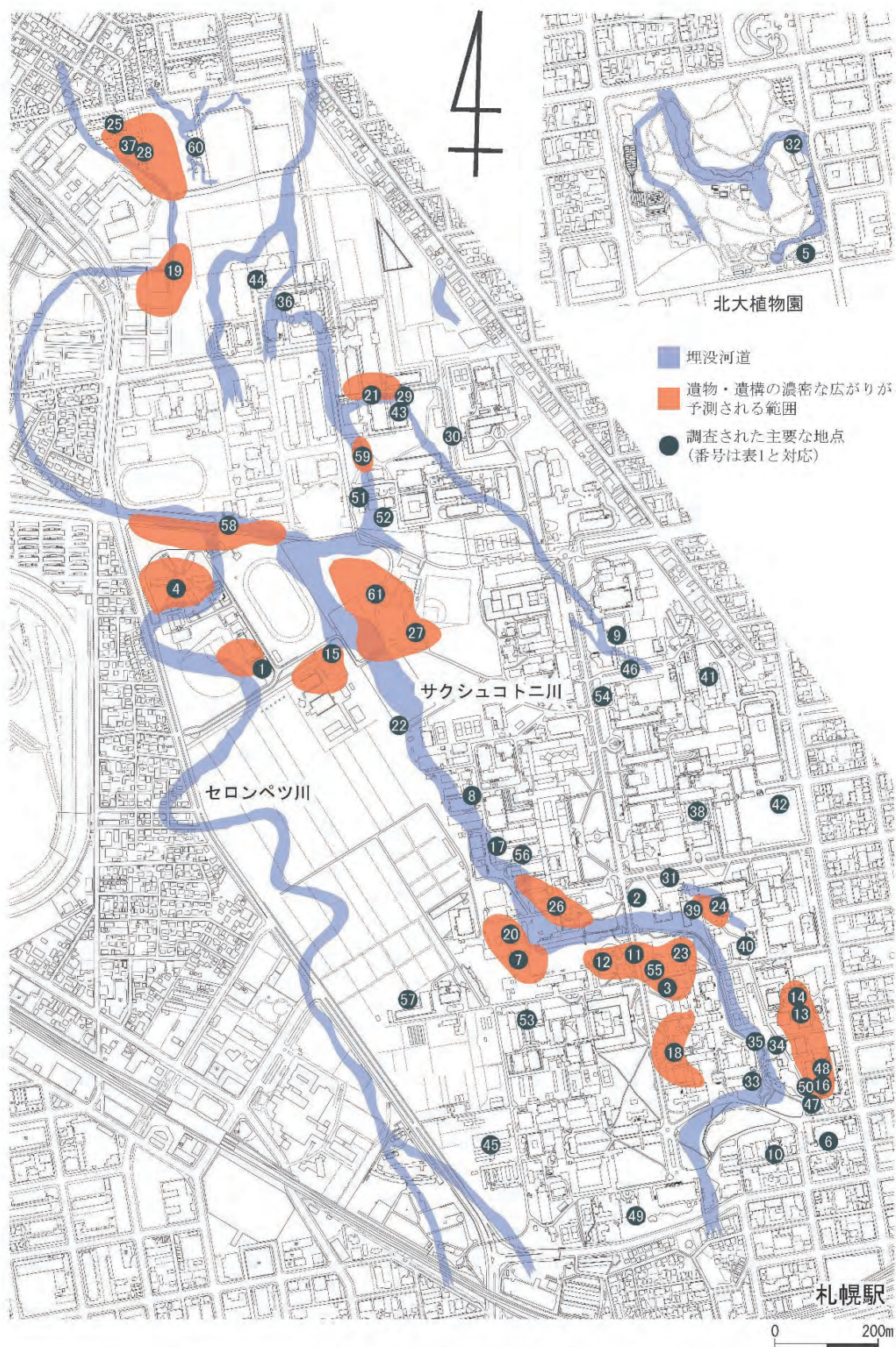


図1 北大札幌キャンパスにおける埋没河道と遺跡

箇所の調査坑を設置し、埋蔵文化財の有無を確認するための調査を実施した。各調査坑では、支障がなければ約 3.0m の深さまで重機を用いて掘削し、調査を実施している。調査の結果、本予定地には擦文文化後期および続縄文文化初頭の遺物・遺構包含層が残されていることが把握された。擦文文化後期の遺物は、本予定地の南西側で局所的に確認された埋没河道内から発見されている。河谷内での擦文文化の文化層の確認は、K39 遺跡医学部百年記念館地点でも同様になされている（小杉他編 2019）。続縄文文化初頭の遺物・遺構は、北側および南西側の埋没河道を除いた調査対象区内のほぼ全域に残されていた。土器や石器などの遺物の他に、小ピットなどの遺構も確認されたことから、近隣の K39 遺跡ゲスト・ハウス地点（吉崎編 1995）や K39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点（小杉他編 2004）と同様に、当該期の生活痕跡が残されている地点と判断される。

3. 計画調査の成果

北海道大学埋蔵文化財調査センターでは、大学構内での埋蔵文化財保護のために、その遺存状況と立地環境の体系的把握につとめるべく、平成 27 年度から「計画調査」という学術調査を数年次にわたって実施してきた。前身の埋蔵文化財調査室時代から埋蔵文化財調査センターは、長年にわたって北海道大学構内での工事に伴う事前調査に従事してきている。その過程で、大学構内での古地形環境の変遷や埋蔵文化財の分布状況に関する膨大なデータを得てきている。今後、北海道大学構内における埋蔵文化財を文化資源として適切かつ有効に保護・活用していくためには、それらのデータを体系的に整理するとともに、新たな学術調査を系統的に大学構内で実施していくこととによって、古地形環境や埋蔵文化財の遺存状況について、精度の高い予測をおこなえるようにしていくことが必要である。

そのため、計画調査では、①サクシュコトニ川・セロンペツ川ならびにその支流の流路を把握し、流路において進行した下刻や堆積の時期・過程を解明する、②サクシュコトニ川・セロンペツ川ならびにその支流内および周辺における遺構・遺物の分布範囲や地点の集中区域を把握する、③各種の考古・古環境データを有機的に統合するための時間的枠組みを構築するために、キャンパス各区域間での層序対比を体系的に実施し、キャンパス全域での堆積環境を明らかにすることを目標としている。現地調査を平成 28 年度から開始し、複数の地区で調査を実施してきた（小杉他編 2021）。令和 3 年度以降は、サクシュコトニ川支流の流路のさらに上流側に位置する中央キャンパス大学病院地区（以下、本地区）において計画調査を実施している。

本地区は、北海道大学札幌キャンパスの東部に位置する。本地区の周辺では、これまでの調査によって擦文文化および続縄文文化の遺物・遺構が確認された地点があることから、そのひろがりの有無を把握すること、ならびに南東から北西方向にむけて流下する河川の存在が予測されることから、その位置の把握と周辺での堆積環境に関するデータを蓄積していくことが目的とされた。本年度は令和 6 年 6 月 10 日～8 月 15 日の期間に調査を実施

した。現在の病院駐車場の西川の区域で 17 の調査坑を設置し、埋蔵文化財の有無を確認するための調査を実施した。今年度の調査範囲はかつて病棟があった箇所に相当するため、TP07・16・17 を除いたそれ以外の調査坑では、地表下約 2.0～2.3m の深さまで客土となっており、自然堆積層の残りは令和 3～5 年度の調査区とは異なって良好ではなかった。結果的に遺物・遺構は確認されなかった。

4. まとめ

未来創造棟新営工事予定地で実施された確認調査では、続縄文文化や擦文文化の遺物・遺構が残されていることが把握された。また埋没河道の存在も確認できた。北側の埋没河道に関しては、周辺でこれまで把握されてこなかったものであることから、その形成から埋積にいたる時期を特定すること、それとの関連で人間活動がどのように展開されていたのかを把握することが重要な課題となろう。

引用文献

- 小杉 康他編 2004『K39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点発掘調査報告書Ⅰ』
北海道大学
- 小杉 康他編 2019『北大構内の遺跡 XXV』北海道大学埋蔵文化財調査センター
- 小杉 康他編 2021『北大構内の遺跡 XXVII』北海道大学埋蔵文化財調査センター
- 吉崎 昌一編 1995『北大構内の遺跡 10』北海道大学

メ モ

K39 遺跡こども本の森地点の調査

守屋豊人／北海道大学埋蔵文化財調査センター

1. 調査の概要

本地点は、大学南門の西側約 200m、141 度 20 分 44 秒、43 度 4 分 4 秒に位置する。令和 6（2024）年 9 月 24 日～令和 6（2024）年 12 月 14 日の期間、本発掘調査を実施した。

調査に至る経緯は以下のとおりである。こども本の森新営工事が関係者によって計画され、令和 6（2024）年度に協議し、確認調査を令和 6（2024）年 7/4～8/16 の期間に実施した。確認調査では、確認坑 11 基（TP01～TP11）を設定して地表下約 1m～約 3m の深さまで調査を行った。その結果、地表下約 0.3m の深さまで客土で、客土の下に 2 層～14 層に分けられた地層が存在した。地表下約 0.4m～0.7m の深さに存在した 2 層（砂質シルト層）からは炉址 1 基、続縄文土器片、礫が確認された。また、地表下約 3m の深さで確認された 12 層（粘土層）では、炭化物集中箇所、礫が発見された。

その成果に基づき、工事関係者と工事予定地を他所に変更できるかどうかを協議した。その結果、主要な建物位置の変更はできないという回答であった。そのため、工事予定範囲の内、上部（2 層）の約 620 m²、下部（12 層）の約 165 m²を、令和 6（2024）年度に発掘調査することとなった。

調査は、表土を重機で掘削した後、地表下約 0.4m～約 1.0m まで重機と人力とを併用して掘削し、遺構・遺物包含層を露出させた。第 1 段階で、上部の遺構・遺物包含層の調査を実施した後、下部の遺構・遺物包含層の調査を実施した。地層の確認では、調査範囲の壁際に幅約 0.5m のトレンチを設定して、地層の連続を把握するように努めた。地層内における遺構、遺物包含層の残存状態を人力で精査しながら実施した結果、工事予定範囲の東側から西側にかけて傾斜した旧地形を確認できた。調査では地表下約 0.4m～約 3m で 4 つの文化層（2a 層、2b 層、8 層、12 層）を確認した。遺構は、褐色粘土質シルト層である 2a 層で、竪穴住居址、土坑、小ピット、黄褐色砂質シルト層の 2b 層では、炉址 7 基、土器集中箇所、黒色粘土層である 8 層では炭化物集中箇所、灰白色粘土層である 12 層では炭化物集中箇所が確認された。遺物は 2a 層で擦文土器など、2b 層で続縄文文化後半の土器など、8 層で続縄文文化前半の土器など、12 層で続縄文文化前半の土器などを確認した。

2. 立地と層序

本地点は、サクシュコトニ川の右岸の高まりに立地する。サクシュコトニ川は、精華亭近くの湧水を源泉として、北大生協建物から附属図書館本館の南側を蛇行し、弓道場近くに向かって流れていたと推定されている。その流路は遅くとも擦文文化に存在していたと考えられる。

標高 16.0m ライン



写真 1 調査区東壁セクション(一部分)写真(地層の境目の目安を細線で示した)

本地点では、確認をおこなった範囲で、13枚の地層が区分され、基本層序として算用数字で示した。上位から1層～13層と表記する。代表的なセクションを写真1で示した。

1層は客土である。2層はシルト層で、土性によって2a層、2b層に細分できた。2a層では樽前山a火山灰が地層中位で確認され、2a1層、2a2層とさらに細分できた。2a1層下位、2a2層では擦文文化の遺構、遺物があった。2b層は褐色の砂質シルト層である。砂質が顕著であった。続縄文文化後半の土器片、炉址が確認された。3層は褐色の粘土層であった。4層は褐色の粗砂層である。5層は灰褐色の粘土層である。4層によって浸食された状態が一部で確認されるとともに、層中には炭化物が多く含まれていた。6層、7層は粘土層であった。8層は、黄褐色の砂質シルト層であった。当該地層の中位、下位で続縄文文化前半の炭化物集中箇所、土器片が発見された。9層は粘土層である。黒褐色の9a層、灰白色の9b層に細分できた。10層は黒色の粘土層である。11層は灰黄褐色の粘土である。12層は、にぶい灰黄褐色の粘土である。地層の中位には、炭化物が列状に存在した。続縄文文化前半の炭化物集中箇所、土器片が発見された。13層は、にぶい灰黄褐色の粘土層である。粘性が他と比較して顕著であった。

2a1 層、2a2 層は、近代に建物が当該地に設置された際に、ほとんど削り取られて無くなっていると考えられた。2a1 層、2a2 層の時期の旧地形は、ほとんど不明である。想像を膨らませると、2a1 層、2a2 層は、本発掘調査で確認された状態より約 1m 高く堆積していたと考える。2b 層は、230 グリットより西側で傾斜堆積していた一方、230 グリットより東側では水平堆積していた。5 層～13 層は、調査範囲の東側において、ほぼ水平堆積していたととらえられた。

本地点は河川に隣接していた高まりで形成されたといえる。ただし、当時の河川の位置は不明な点があり、今後、明らかにすべき事柄の一つと考える。本地点周辺での調査事例が増加することによって、擦文文化、続縄文文化での河川位置が明らかになると考える。

3. 遺構と遺物

遺構・遺物は、地表下約 0.4m～約 3m の位置にあった地層（2a1 層下位および 2a2 層、2b 層、8 層、12 層）で確認した。時期は擦文文化～続縄文文化前半と位置付けられる。

擦文文化の遺構の一部は、遺構の掘り込み面が示された地層が近代の開発によって失われていたため、時期把握できない場合があった。擦文文化の遺構で形成面の地層が確認された事例に基づき、各遺構の掘り込み面を推測した。その結果、ほとんどが 2a1 層の下位および 2a2 層（第 1 文化層）の時期と判断された。竪穴住居址、土坑、小ピットが確認されている。2b 層では、続縄文文化後半の土器片とともに、炉址が確認された（第 2 文化層）。8 層では続縄文文化前半の土器片とともに、炭化物集中箇所が発見された（第 3 文化層）。12 層には、続縄文文化前半の土器片とともに、炭化物集中箇所が存在した（第 4 文化層）。

以下では、4 つの地層から発見された遺構・遺物を、上記の 4 つの文化層に分けて説明する。

（1）第 1 文化層（2a1 層下位および 2a2 層）で確認された遺構・遺物

本地層では、擦文文化の竪穴住居址 3 基（HP01～HP03 と表記）、焼土粒集中箇所 1 基が確認された。遺物には、擦文土器片、石器、礫が存在した。竪穴住居址の内、HP01 は全体の約 1/3 が 232-50 グリットで確認され、精査した。残りは調査範囲外で保存されている。HP02 は、228-48 グリットで確認した。平面形が隅丸方形（約 4m×約 4m の規模）で、カマドが竪穴の南東壁にみられた。竪穴内に堆積した地層で炭化材、焼土が重複して発見されたことから、何らかの理由で上屋が焼けた痕跡と判断した。HP03 は調査範囲の南東端で樹木の伐根を行った際に 234-48 グリットで確認した。伐根規模が大きかったことから調査範囲外まで表土を掘削したため、確認できたといえる。最小限の調査に留めた結果、HP03 のほとんどは、本調査範囲外に保存されている。

（2）第 2 文化層（2b 層）で確認された遺構・遺物

2b 層では、炉址 7 基、炭化物集中箇所 1 基、土坑 5 基、小ピット 8 基が確認された。本地層では炉址が多数確認された。第 1 号炉址（HE01）、第 2 号炉址（HE02）は、調査範囲



写真 2 2b 層面での調査状況（南西から）



写真 3 2b 層で確認した第 1 号炉址（HE01）の状態（南西から）



写真 4 2b 層で確認された第 2 号炉址 (HE02) の断面 (東から)



写真 5 2b 層で発見された深鉢形土器 (続縄文文化後半: 約 3 世紀から約 5 世紀)

の東半分で発見された（写真 2、写真 3、写真 4）。調査範囲で確認された土坑の一部および小ピットの一部では、掘り込み面がとらえられなかった。そのため、上位の地層から掘り込まれた遺構の可能性がある。遺物には、続縄文文化後半の土器、黒曜石製石器、礫がみられる。2b 層の上面及び中位では、1 個体分の土器片がまとまって、調査範囲東側および調査範囲西側で発見された（写真 5）。

（3）第 3 文化層（8 層）で確認された遺構・遺物

8 層では、炭化物集中箇所 1 基が発見された。遺物では、続縄文文化前半の土器片、礫が確認された。続縄文文化前半の土器は 8 層中位および 8 層下位で散在する様子であった。

（4）第 4 文化層（12 層）で確認された遺構・遺物

12 層では、炭化物集中箇所 1 基が発見された。遺物では、続縄文文化前半の土器片が多くみられた。その他では石器、礫が散在していた。石器には、磨製石斧 1 点がみられた。

4. おわりに

本地点の発掘調査によって、河川に隣接していたと考えられる高まりで、擦文文化～続縄文文化にかけての遺構が累積していることが明らかとなった。12 層、8 層でとらえられた遺構は数量、種類が少なく、遺物は地層中で散在している様子であった。そのことから、高まりで一時的に活動していたキャンプ地であったと推測される。

2b 層では炉址が多数確認された。高まりで残された炉址が多い一方で、同時期の土器片、石器の出土数は少ない傾向であった。そのことから、2b 層では、一時的に高まりで火を利用したキャンプ地が形成された可能性が高い。構内の他地点と比較すると、他の地点よりも炉址の数量が多いと位置づけられる。何度も高まりを利用した当時の様子が伺われる。石井淳が、札幌周辺の遺跡分析によって続縄文文化後半の土地利用を 5 区分した内、扇状地における土地利用のあり方と共通する様相である（石井 2005）。

2a1 層下位および 2a2 層では、竪穴住居址が確認された。当時の集落が高まりで形成されていたと推測する。

本地点の発掘調査によって、河川に隣接していた高まりで形成された生活の様相が続縄文文化前半、続縄文文化後半、擦文文化と変化していく過程がとらえられた。

引用文献

石井 淳 2005 「札幌市内の遺跡分布からみた続縄文時代の土地利用方法-道央部における続縄文時代の行動様式の復原にむけて-」 『海と考古学』 pp.141-166 海交史研究会 考古学論集刊行会

※今回、発表した内容は、発掘調査報告書を作成途中のため、変更する場合がある。

続縄文文化についての見解

鈴木 信／(公財)北海道埋蔵文化財センター

1-1. 続縄文の「一縄文」とは（鈴木 信 2021）

北海道の「縄文」は、自然環境・食料生産において本州の「縄文」と違いがある。北海道全域で縄文文化の自然環境が整う時期は後氷期の温暖期以降であり、少なく見積もっても本州に比べて3,500～1,500年遅れて形成された。それにより、生業においては本州の縄文要素の欠落があり、受容した場合にも限定的（遅滞かつ少例）となった。例えば、ウルシ栽培（欠落）、クリ栽培（遅滞）、トチノキ管理・イノシシ飼育（遅滞かつ少例）。

よって、北海道の縄文文化は、石狩低地帯以西については遅滞・少例より「変則的縄文文化」、日高山脈以東については欠ける要素が多いので「逸脱的縄文文化」といえる。

1-2. 続縄文の「統一」とは：続縄文の何が連続的なのか（鈴木 2021）

北海道では後氷期・温暖期以降、日高山脈石より西：冷温帯林、日高山脈より東：北半は主に亜寒帯林（北方針広混交林）で南半は冷温帯林、という自然環境が持続する。それにより、続縄文は、縄文型の網羅的生業を維持しながら①・②の変化をする。①「生業の特化：威信の漁撈→対価獲得猟」、②「広域交換の生業基盤化：第二の道具（玉類など）の交換→第一の道具（鉄器）の交換」を行った経済である。これを以て、続縄文前半期的特徴→続縄文後半期的特徴という。後北C₂・D式期は①②の過渡期（→）を含む後半期にあたる。

＊ 山内清男の続縄文：弥生と並行する東北地方北部と北海道に跨って広がる文化

2. 今日^{こんにち}の北海道続縄文（鈴木 2021）

続縄文は、現在学界でいう縄文時代晩期後葉に始まる。縄文晩期後葉以来の量的資源拡張は「生業の特化」が実態である。北海道の続縄文は、①道南・道央：縄文的状況に後戻りする「変則的縄文→変則回帰型続縄文」。②道東：縄文的状況を維持する「逸脱的縄文→逸脱継続型続縄文」といえる。

①において極僅かに水稻耕作に関わらない弥生系要素が威信の漁撈にあり、盛行するが中葉後半に衰退した。よって、北海道は弥生化（水稻耕作）はしていない。そして続縄文は、ほとんど「縄文文化“技術複合体”（Clarke 1978）」的状況が「特化した経済」であること、“技術複合体”にあたる必要条件を持つので、縄文・弥生と同位であり、別系統の文化区分である。なお、弥生化と関わらない続縄文は縄文→弥生への移行段階ではないので林謙作（林 1988）のいう段階区分としての「続縄紋」は成立しない。

＊技術複合体とは：文化＜文化群の上位概念、David Clarke の提案。環境・経済・技術において共通要素が、広く拡散しながら相互に関連して共有され、環境戦略における文化的収斂の物質的現われ。その範囲は推定半径 1208～4830 km。

＊D. Clarke：1934～1976、英国プロセス学派、彼の先駆的研究はポストプロセス学派の始祖 Ian Hodder から敬意・賞賛を受けていた。彼は学派を越えて英国現代考古学の祖と位置付けられる。残念ながら彼の夭折と理論的背景である生物学における数量分類学の衰退などによって日本ではあまり紹介されることがなかった。

3. 東北北部は、〇〇型続縄文といえるのか？（鈴木 2022）

語幹の「縄文」：東北北部で縄文文化の自然環境が整う時期は晩氷期の温暖期以降（15,000～13,000calBP）である。生業において縄文要素の欠落がない。接頭語の「続」：晩氷期の温暖期以降、冷温帯林という自然環境が持続される。そして、食物摂取と生業の関係において、人口が増加しても採集・栽培の熱生産量に飛躍的増加が生じず、従来の生業を激変させることなく灌漑水稻農耕の導入が容易で、雑穀栽培も継続する。

東北北部は一時期に弥生化（水稻耕作）するものの、断続的・点状の広がりである。弥生後期以降には水稻耕作をやめて、水稻とともに導入された雑穀栽培・狩猟採集を引き続き行う。東北北部は北海道続縄文とは違う東北北部型の「回帰型続縄文」といえる。林の「続縄紋」は成立しないが、雑穀栽培をどうとらえるかによっては再考の余地がある。そして、東北北部に少数の北海道続縄文文化人が斑状に定住していた。

いっぽう東北中南部では、弥生化が定向的に進捗し古墳文化に至る。縄文→弥生への移行段階が設定可能であり、林の「続縄紋」が成立している。

引用文献

鈴木 信 2021『北海道続縄文文化の変容と展開』 同成社

鈴木 信 2022「続縄文文化の変容と北東北の関係」『北方世界の交流と変容』滝沢市教育委員会

林 謙作 1988「続縄紋のひろがり」『季刊考古学』19 雄山閣

Clarke, David L 1978 *Analytical Archeology* (second edition). London Methuen



高畑宣一氏による「旧琴似川流域の竪穴住居跡分布図」

破線内が北大構内:推定 所蔵：札幌市埋蔵文化財センター

札幌市教育委員会 2001「K39 遺跡―第 6 次調査―」口絵 1-9 転載・加筆

第 14 回北海道大学埋蔵文化財調査センター調査成果報告会要旨集

発行日	令和 7 年 2 月 24 日
編集発行	北海道大学埋蔵文化財調査センター 〒060-0811 札幌市北区北 11 条西 7 丁目 E-mail hokudaimaibun@gmail.com
印刷	柏楊印刷株式会社

※発表内容についての正式な事柄は、刊行予定の報告書を参照いただきたい。



K39遺跡こども本の森地点 2b層で確認された第2号炉址（HE02）の断面（東から）